

茶道と銀座書齋との間にみられる共通性

今年最後のお稽古日は、「夜咄の茶事」が行われた。

「夜咄の茶事」とは茶事七式の一つで、寒さ厳しい季節の夕暮れ時から、和蠟燭のみの灯りの中で行われるもの。

当日はとても寒く、私は冷たい手をして伺った。すると、寄付きには葛湯が用意されており、お茶碗から伝わってくる温もりとともに、お心遣いが私の身と心に沁みわたった。寒い季節には暖房を、暑い季節には冷房を、時には換気をして受講生を迎えて下さる生井先生のことを思い出していた。

正客が手燭を持ち、客は庭に降りる。沓脱石のところでは、先に草履を履いた人が、立てかけてある草履を次の人のために石の上に揃えて置く。戻るときは逆で、先に脱いで上がった人の草履を次の人が脇にたてかける。

腰掛には手焙が用意されており、ここでも心遣いを感じられた。きれいに掃除（美としての掃除）された庭を鑑賞しながら待っていると、亭主が手燭を持って迎えてくれた。中門で亭主と主客が手燭を交わし、蹲踞へと進む。無言で交わすのだが、とても厳粛で神聖な光景だった。



※画像は全てイメージで、
実際私が参加したものと異なる

外気により冷やされた蹲踞の水は、私の体を収縮させ、生かされていること、自然と共存していることを感じさせた。蹲踞の前には湯桶が用意されており、口をすすぐ時に使うとのこと。これも亭主からの心遣いである。温かな湯気を放つ柄杓からは、とても清々しい木の香りがした。

私は日頃、銀座書齋でのレッスンと茶道との共通性を、入室する前から感じている。階段脇に飾られている絵画は、本物を間近で鑑賞することができる貴重な機会であり、植物は、自然との共存を思い起こさせ、心の浄化が図られていく。そして整然と並べられた先生の

著書からは、先生の魂を感じ、まるで先生がそこで迎えて下さっているようなのだ。
そう、ここから空気はかわり、私にとって先生が心を込めて飾って下さっている階段脇は、亭主が客を迎えるため、心を尽くして整えられた露地なのだ。

打ち水をされた沓脱石からは、清潔感を感じる石の香りを確認できる。ただ履物を脱ぎ履きする場所ではなく、そこには心が存在する。レッスンで拝借するスリッパも、先生が毎回揃えて下さっているのであり、当たり前のようにそこにあるのではない。

初炭の香合は「龍」。今年一年を振り返り、また、残り少ない 2012 年をどう生きるかを改めて考えさせられた。お香を聞きながら、赤く染まる炭を亭主と客が同じ空間で味わい、心を通わせる。

茶室には短檠、手燭が灯されており、最初の飾り付けは面だった。拝見の際、手燭を近づけ、その和蠟燭独特の炎により浮かび上がった翁の面は、以前観た薪能を思い起こさせ、私を幽玄の世界へと誘った。(翁：天下泰平、五穀豊穰、長寿等、祝福をもたらす)

お点前を拝見しながら、静寂な空間の中、袱紗を捌く音、湯を注ぐ音、茶筌通しの静かな音を聴いているうち、私は完全に幽玄の世界に入っていた。和蠟燭の炎により、大きく壁に映し出された亭主の影が微妙に揺れ動いている。その影がまるでご本人がこれまで歩んでこられた人生のように思え、「これまで生き抜いてきたから“今”ここにいる」という尊さを感じた。その半生の舞台を、私はしばらく時を忘れ見入っていた。



茶事でいただく懐石は、長い時間をかけて献立を考え、試作・試食を何度も繰り返し、万全の準備で当日を迎える。だからこそ客は五感を上品に刺激するあのようなお食事を頂くことができる。(ここでも灯りは手燭のみ)

最後は釜を上げ、炭をつぎ、香をたく。客が帰る前に部屋を暖め、暖をとってもらう（「どうぞごゆっくり」という亭主からの心遣い）ことと、名残を惜しむという意味があるという。この時の香合は「狸」。狸は人を化かすとされる。ここで狸に会っておけば、帰りの夜道で化かされることはない、客の無事を願ってのものである。炭の暖かさは人の心のように優しく、「一期一会」、「永遠ではないのだ」とまさに名残を惜しむ時間であった。そして、ふと視線を下げた時、蠟燭の灯りに照らされた炉縁の塗りが、とても美しいことに気がついた。

帰りの露地には行灯が灯され、最後まで幽玄の世界が広がっていた。茶事後の心地よい余韻は今でも私の心に残っている。



茶室、いや露地から全てに、亭主の客へと誠意を尽くす心が込められており、それぞれに意味がある。亭主は客を心からもてなし、客は亭主の心を十分に察しそれに応える。双方の心が通って、その空間が成り立つ。これは両者の間に「相手を敬い、自分を慎む」という、見えない一線が引かれているから成立するのだろう。

銀座書齋でのレッスンと非常によく似ている。生井先生はそれぞれの受講生にとって最良となるよう準備を整え、レッスンを行って下さっているから全てに意味がある。受講生はそれに応えられるよう、「清く」「謙虚に」「厳粛に」、理性と感性を最大限に駆使する。そして先生と心が通い合えた時、そこに言葉では表現できないエレガンスな空気感が生まれる。

今回は大変恵まれた貴重な経験をさせていただけたことで、多くの学びや気づきを得られ、新たな興味の枝も伸び始めた。それらをしっかりと吸収して、レッスンの中で生かし、自身の「音」を磨いていきたい。